

第四章 災害

一 地震、津波

海部郡沿岸に關係のある大地震として記録に残っているものの内、主なるものを挙げると左の如くである。

日 本 歴	西 歴	主なる被害地
白鳳十二年十月十四日	六八四年一、二九	土佐 伊予 大和
正平十六年六月二十四日	一三六一年八、三	摂津 大和 紀伊 阿波 山城
永正九年八月	一五二二年、八	穴喰
慶長九年十二月十六日	一六〇五年一、三一	薩摩 土佐 紀伊 伊勢 伊豆 上総 遠江
宝永四年十月四日	一七〇七年一〇、二八	五畿七道
安政元年十一月四日	一八五四年一、二三	東海道 畿内 北越 阿波 山陽道
安政元年十一月五日	一八五四年一、二四	紀伊 四国 中国 九州 清国 江南
昭和二十一年十二月二十日	一七七一年一、二二	南海 特に牟岐 浅川

慶長九年（一六〇四） 十二月十六日未明、西上刻、月の出頃より大津波、溺死者多数（トモ大省供養碑）

宝永四年（一七〇七） 十月十四日、紀洲沖大地震、地大いに震い五畿七道に及び有史以来の規模、大汐入り来りて浪流れ沿岸の人家漂没し人畜多く溺死、森甚五兵衛に命じて救恤す。

八幡神社の掛板に宝永地震の記録あり。「この節大内治郎右衛門、牟岐浦へ罷越御用相勤居候所、津波一統人馬共流死の多候処、一人山へ立退御役所内並御用物津波にひかれ候の時、不罷帰、御案内不致随意に御用先より罷帰候

段、不届に付永の御暇」という逸話がある。

寛正元年（一七八九） 四月十六日海部郡において夜九ツ時地震あり田地ごとく割れ、みぞ崩れ石垣くずれ地震後四月十八日まで、住民山林へ逃げる。

安政元年（一八五四） 十一月四、五日にわたる相模湾の豆相震源地、十一月四日朝辰の下刻（午前九時頃）大地震あり、五日夜明けまで五六度ゆれ人々林藪ににげる。五日午時三時頃大地震となり、つづいて午後八時頃にも大地震があり、十四日午前一時に大震午後十時頃別段強い地震があり、潰家が多かった。加うるに十四日大雨、十六日には午後五時頃より大雪が降り災害を大きくし沿岸に大津波の襲来となり、人畜死傷甚しく老公（齊昌）一万両を救恤す。

「大地震樹木枝を鳴らし井水濁り水瓶に汲みおきし水、庭へ悉くこぼれ、海には汐狂いたる由」の程度で津波も単に海水が一丈余り増減あった程度で大した被害もなかったが、翌五日の地震は四日のそれに倍したもので、これに伴った津波もすこぶる大規模で一部落全滅の所もあった。その他潰家浸水多く八〇三戸の中、わずかに六七戸のみが無難であった。津波の高さ三丈余山々の麓へさし込んだ汐先は五、六丈にもみえたという。

家屋流失状況

	当時の家数	流失家屋数
西牟岐浦	一七五	全戸
東牟岐浦	三五七	三五四
中村	一二九	三六
川長	四〇	三六
ナダ	六六	二九
内妻	三六	一三

出羽島地震碑（観栄寺石碑）別項碑文参照

二 火 災

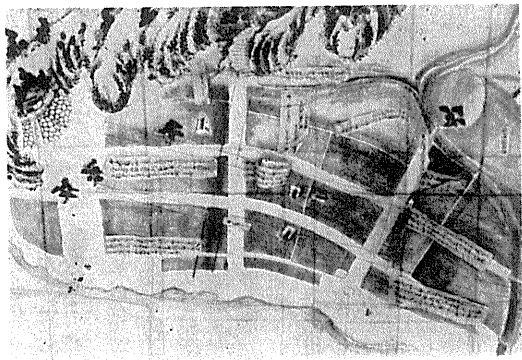
天明元年（一七八二） 四月九日丑刻、東浦民屋より出火、家数二七三戸を焼き翌十日巳刻鎮火。（年表秘録）

天明五年十月朔日 牟岐浦灘村民家より出火、三五六戸焼失同夜丑刻鎮火。

享和二年（一八〇二） 牟岐町大火、浦中不残焼失（山田家文書）これにより防火線のため東浦には七間町ができた。

文政五年（一八二二） 二月二十一日午刻、中村民家より出火、牟岐浦へ移り三二五戸焼失、未下刻、中村下ノ町花やにて鎮火（年表秘録）（牟岐東浦火災図、役場蔵）

この時昌壽寺に飛火して同寺も焼失した。この火災をサブキチ焼と称す。文化十年（一八一三） 中村及び西浦全部が焼失、これを雄どり焼と称した。



牟岐東浦火災図

出羽島観栄寺石碑



出羽島観栄寺境内にある安政地震碑

出羽島観栄寺境内に安政地震の事を刻した碑が建てられている。此の碑は砂岩で四角柱状をなし地上の高さ四尺二寸、幅七寸である。刻文左の通り

嘉永寅年十一月四日朝五時大地震一時計、潮狂ニ有之、高下共式丈餘、同五日晝七時地震半時計ニ而大汐来、其高サ同断出羽之嶋へ前日ヨリ山上リ致候事故、怪我人無之相済候、是神仏之御守有ニ依而也、後々ニ至迄信心忘ル事不可有也左ノ通大汐之砌

御上ノ菅人前米六升被下置候 廿八人 吉之亟

大震潮記念碑

(牟岐小学校前道路に面す)

安政元年甲寅歲十一月四日辰刻午前八時地大ニ震フ。巳の刻午前十時狂汐進退度無ク温度殊ニ高シ。人々恐怖ニ堪へズ。山頂ニ避難ヲナシ、憂愁裡ニ一夜ヲ過ゴス。翌五日晴天、風雲無ク日輪矇朧トシテ申刻午後四時大地震暫ク揺り丈餘ノ逆流襲来陵ニ襲リ反覆三次ニシテ止ム。家屋ノ流失六百四十戸、溺死三十九名。若シ夫レ天変地異ノ兆候ニ遭ハバ、油断ナク避難ナスコト肝要ナリ。

震 歴

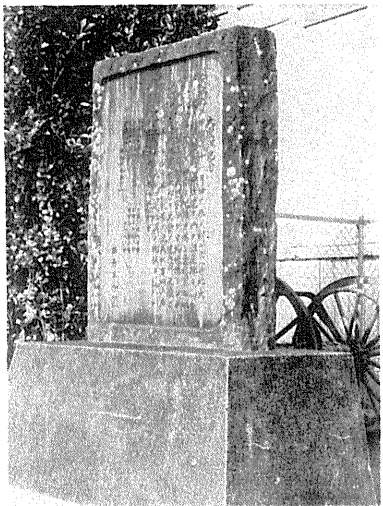
永正九年津浪	四百二十一年前
慶長九年海嘯	三百二十九年 高サ十丈餘 七度襲来ス
宝永四年大潮	二百二十七年 前
安政元年大潮	七十八年前
昭和六年五月一日	

世話人	西分団員一同
久佐木	種太郎
目良	有遠
龜田	利夫
田原	重一
新開	理一

石工 新開理一

南海津浪記念碑

昭和二十一年十二月二十一日の大震汐の惨禍に鑑み後世の災厄に備うる為地盤埋立を起工し、幾多の難関を克服し十カ月の日支と九五万の工費及び五、七二〇名の就工人員を要し遂に翌年十二月本事業を完成更に旧名坊小路を旭町と改称す。因に之に關しては大平正敏、橋本力・天野清市各氏の物心両面の犠牲と尽瘁に与つた事を銘記する茲に地区民の総意により一基を建立して記念とする



大震潮記念

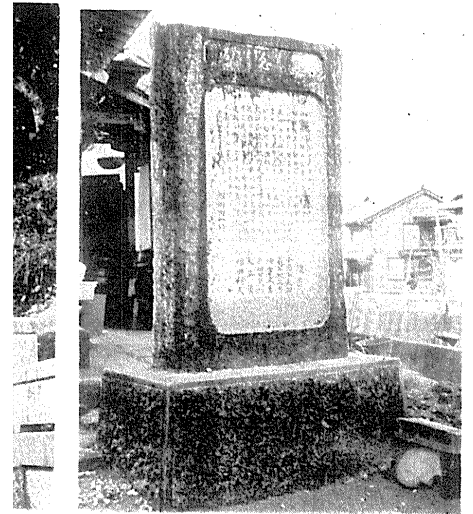
大地震の直後津浪の襲来を心すべきである 富田重雄撰書
昭和二十四年十月二十八日

旭町内一同

役員

- 小島 千太郎
- 亀井 祖父吉
- 沖吉 丈吉
- 浜田 育太郎
- 福田 利夫

注 この津波は観音川に押しよせ地盤が低い地点に溢れ一層被害を大にしたので地主喜田助四郎、谷治太郎氏の協力を得て土地の嵩上したのである。



南海津浪記念碑